

心の整理

青森県新郷村立野沢中学校

二年 岡 田 香那美

目の前が真っ白になった。

あれは去年の、もうすぐ一学期が終わろうとする日のことだった。いつも通りに授業が終わり、掃除をしていた私は床を掃き終わり、ゴミを捨てに行った。そのとき、ゴミ箱の中に見覚えのあるものが見えた。私のファイルがチョークの粉にまみれてそこにあった。プリントはグシャグシャに丸められていた。

私は変な声を上げて固まってしまったらしく、友達が心配そうに、「大丈夫？」とかけ寄ってきた。そういえば以前にもプリントやはちまきがなくなっ

て慌てたことがあった。私は立っているのが精いっぱいだった。

夏休みが終わって二学期になったけれど、私は学校に行けなかった。母に、

「送って行くから、準備しなさい。」

と言われても、どうしても行くことができなかった。私だって、学校に行かなければならないことくらい分かっていた。でも、また同じようなことが起こるのが怖かった。

夜、なかなか眠ることができなくなり、昼夜逆転の生活になってしまった。担任の先生や保健の先生と話せたのは初めてのころだけで、だんだん会うこと

がつかなくなっていった。私は、届けられた「学級だより」をぼんやり眺めるだけだった。

父は私に一度も「学校に行け。」とは言わなかったけれど、毎朝、

「そろそろ起きて、手伝って。」

と声をかけた。初秋の頃で、稲刈りはまだ先だったけれど、やることはたくさんあった。

最初の手伝いは、精米所の傷んだ床板を修理することだった。精米機械の整備も手伝った。初めての

ことばかりで、くたくたに疲れて家に帰った。秋が深まると稲刈りの手伝いをした。そして、父と一緒

にぎんなんの実を拾った。

こんなにやくいもの手伝いもした。主に草取りだったが、長い畝が何列もあるので、手も腰も痛くなった。同じ作業の繰り返しはつまらない。ずっと同じ体勢なのは苦しい。それでも私は数日間同じことを続けた。

楽しいこともあった。畑の端に柿の木があつて、実がちょうどよく色づいていた。長い柄のはさみを

使って、高いところにある実を切り落とすのだが、これがなかなかうまくいかない。四苦八苦しながら収穫するのも、意外に楽しいものだった。

ある日、父に、

「神様とこの落ち葉片づけるから手伝え。」と言われた。神様とは、集落の外れにまつられた石像のことだ。父はこの神様が、災厄や病氣からこの地域に住む人々を守ってくれているのだと話した。昔からうちで世話をしているのだと言った。この石には少し気味の悪い絵が描かれていて、まがましい感じがするので、私には近寄りたいたいのだった。しかし、父からその由来を聞き、自分で落ち葉を掃き清めることで、何か親しみのようなものがわいてきた。この日を境に、散歩で行くことも多くなり、神

様の掃除も真剣にやるようになった。私が何か神様のためにすることで、私自身が守られているような気がした。

休んでいる間に、本をたくさん読んだ。自分が好きな歴史の本や、姉から借りた小説など、いろんな本を読んだ。その中に、心に残る言葉がいくつかあった。「弱くて、ずるくて、楽がしたくて。ねたんんだり、うらやんだり。そういう感情をもっている。——人間だから。」

人間にはきつと、みんな醜いところがあると思う。私だって人をねたむことがあるし、不機嫌になることもある。嫌いだという感情を抱くこともある。それでも、その心の中の醜さを表に出すのか、出さないのか、出すならどう出すのか、出さないならどうしまっておくのかは人によって違うと思った。

三学期になって、私は学校へ行くようになった。最初は教室に入れなくて、保健室で過ごした。その間に私は鶴を折った。部活動や委員会活動でお世話になった三年生が、高校受験に合格することを願いながら。時々友達がやってきて話をすると、楽しいと思えたとし、保健の先生と話していると、心が軽くなつていくような気がした。

二年生になり、私は新しい教室に登校した。新入生が入学してくるのが楽しみだった。去年のことがふつ切れて、暗い気持ちがなくなっていた。私が学校に来られるようになったのは、家族や先生や友達から元気をもらったからだ。そして、学校ではできないようなことをたくさん体験できたからだ。誰かとつながり、田んぼや野山とつながっていたからだ。私はいろんなことを体験する中で、「心の整理」ができたのだと思う。

心に残った本の中の言葉がもう一つあった。「理屈で心は動かねえよ」